

2013 年度 第 3 回 全体研究会 アジアで活躍する仏教指導者（第 1 回）

■開催日時：2013 年 5 月 18 日（土）13:00～17:00

■場所：大宮学舎西翼 2 階大会議室

■参加者：22 人

■ファシリテーター：佐藤智水（龍谷大学文学部客員教授、龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター 研究フェロー）

■報告者・報告題目・コメンテーター：

①釈自衍 師（香光尼衆仏学院教師、香光尼衆仏学院図書館館長）

「臺灣仏教尼衆教育之發展概況（台湾仏教における尼僧教育の發展の概況）」

コメンテーター：桂紹隆（龍谷大学文学部教授、BARC センター長）

②釈見晋 師（香光尼衆仏学院教師）

「台湾仏教尼僧之戒律施行概況与案例（台湾仏教における尼僧の戒律施行の概況と実例）」

コメンテーター：中川修（龍谷大学文学部教授）

③釈見豪 師（香光尼衆仏学院副院長）

「台湾仏教尼僧在安寧療護的参与和反思（台湾仏教における尼僧のホスピスへの参与とその回顧）」

コメンテーター：早島理（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】

現代台湾仏教においては尼僧が非常に重要な役割を果たしており、社会的にも高い評価を得ている。また、世界中で比丘尼戒を伝授しているのはただ台湾だけである。自衍師は教育、見晋師は戒律、見豪師は仏教ホスピス（ビハーク）の観点から、それぞれ現代台湾仏教における尼僧の現状と課題について論じた。なお、見豪師は急病のため欠席し、渡邊慎吾氏（龍谷大学研究生）がその原稿を日本語に訳し代読した。

【報告の概要】

自衍師は、台湾社会において比丘尼が重視されている原因として、①教育の充実、②積極的な社会救済、公益慈善、教育・文化事業への参与によって社会の肯定を得たこと、という二点を指摘した。そして、最新の統計に基づき、台湾仏教の比丘尼の受戒者数の年代的变化、および、比丘尼のうち高学歴者が多数をしめることを明らかにした。さらに、それぞれ異なる教団に属する14名の比丘尼に対する独自のインタビュー取材に基づき、属する教団の規模に応じて比丘尼達が受けた教育の経歴に差があることを指摘した。すなわち、大規模な僧団ほど、その教育が制度化・集団化されており、小規模な僧団では、師長や団体の理念あるいは比丘尼数の多寡等により、受ける教育が大きく影響されることが指摘された。最後に将来への課題として、修行を出発点として戒定慧を養成することを重視する伝統的僧団教育が、学術的な客観的知識を重んずる大学教育によって改変を逼られていること、尼僧の僧団離れ、現実社会の流行への対応を過度に重視することに伴う本来の仏教のあり方からの乖離、などを指摘した。

見晋師は、台湾における比丘尼戒の伝授の歴史を概観した後、代表的な四ヶ所の尼僧教団が有する、戒律に対する態度の特徴について論じた。師によれば、義徳寺と南林尼僧苑は「律」（特に南山律）を重んじており、尼僧が具足戒を受ける際、比丘の参与も必要とする「二部僧受戒」や、比丘尼が比丘に対して守るべきことを定めた「八敬法」を受持している。一方、仏教弘誓学院と香光尼僧団は「法」を重視する傾向にある。弘誓学院の昭慧法師は「八敬法を排除する宣言」を公表し、「二部僧受戒」に対しても否定的立場をとり、男女平等・死刑廃止を訴える社会的運動にも積極的に参与している。また、香光尼僧団は、「戒律は世界悉檀である」（時・地・人に適応することを重視する）という観点から、伝統的戒律と近代的修行生活を統合するという立場に立ち、比丘尼を積極的に教化活動に従事させている。見晋師自身は、以上の尼僧教団の律に対する二種類のあり方に対して、共に警鐘をならす。すなわち、「律」を重んじる者が古制にこだわれれば、ただ形ばかりとなり律の本義を失う。一方、「法」を重んじる者は律を軽んじて議論しなくなり、かえって最も重要な「第一義悉檀」を忘れ得る。「世間悉檀」と「第一義悉檀」に対する正しい理解に従い、仏法を未来に永続させるという目標にいかにして到達するのかを真剣に考えなければならないと述べた。

見豪師は、最初に、仏教はターミナルケアを非常に重視した宗教であるとし、ホスピスは医学・心理学・宗教などが各長所を生かし総合的に患者のケアにあたるものであり、両者を区別すべきと注意を喚起した。次に台湾におけるホスピスの歴史を概観した。台湾では、1981年に西洋のホスピスの概念を導入し、最初是在宅ケアから始まり、1990年によりやうく病院にホスピス病棟が開設され始めた。1995年から緩和ケア病棟が開設され、1999年には臨床仏教師による病院でのホスピス活動への参加が始まった。臨床仏教師になるためには、四段階の学習課程を受講して合格し、さらに育成訓練に合格する必要がある。臨床仏教師として実際に病院で働く者はのべ31名で、台湾尼僧全体のうちごく一部である。その理由として、1病院に臨床仏教師が1人という制度上の問題、所属する寺院が許可するかどうかの問題、ホスピス病棟の専門組織メンバーが臨床仏教師の患者に施すスピリチュアル・ケアを尊重し信用できるかの問題、ホスピスの「善終」理念と仏教の立場の違いなどがあることを指摘した。最後に台湾の仏教ホスピスははまだ初歩段階だが、世界各国と比較すれば進歩しており、積極的に肯定し支持していかねばならないと結論づけた。

【議論の概要】

自衍師の報告に対し、桂紹隆氏は、台湾では尼僧教団の力が強く、出家後尼僧がやりがいを感じるというのは、台湾社会において女性の地位が低いことと関係があるのかと質問した。それに対し自衍師は、必ずしもそうではないが、出家すれば社会的活動の範囲が広がることは事実であると答えた。また、尼僧の学習内容は、漢伝に限られるのか、それ以外のものもあるのかと質問した。それに対し、漢伝中心であるが、南伝、藏伝も学ぶ機会があると自衍師は答えた。

次に見晋師の報告に対し、中川氏は、義徳寺・南林尼僧苑が八敬法を遵守していることに儒教の影響があるかどうかと質問した。見晋師は儒教の影響は存在すると答えた。また、台湾尼僧教団では大乘戒の検討はなされているのかと質問した。それに対し見晋師は、香光尼僧団では菩薩戒は当然持たねばならず、以前は梵網戒であったが、後に瑜伽師地論に基づく瑜伽戒も用いるようになったと答えた。

見豪師の報告に対し、早島氏は、台湾と日本の仏教ホスピス（ビハーク）はほぼ同時期に始まりながら、30年後の現在では日本が非常に遅れをとり、終末期医療を担う仏教者側の人材を養成する制度が日本ではいまだ構築されていないと述べた。また、日本の終末期医療の場合は、「エンディングノート」・「終活」などの言葉が示すように、どうすれば安らかに死ぬことができるかに重点が置かれ、死後の世界観を示すことなく進んできたという問題点があることを指摘した。

